ご自由にお持ち帰りください

人と地域と医療を繋ぐ秋本病院の情報誌

Brief Letter ブリーフレター 52

DECEMBER 2012



平成 15 年夏　上高地帝国ホテルにて秋本徹撮影

一周忌を迎えて
名誉理事長 故秋本徹 特集



編　集　後　記

2012 年 11 月 26 日父秋本徹の一周忌を迎えます。あっという間の一年でした。
懐かしいとか寂しいという感情とは別の想いで過ごしてきたような気がします。
このブリーフレター 52 号は院長・秋本亮一の発案で緊急発行となりました。急なお願いでしたのに、お忙しい中原稿を書いていただいた皆さま本当にありがとうございました。拝読しながら、当時を思い出したり、胸がいっぱいになったり、思わず溢れ出そうになったりの編集作業でした。

表紙と裏表紙の写真は、院長を息子に譲り、やっと夏休みがとれるようになった父が、労苦を共にしてきた母と毎年訪れるのを楽しみにしていた“長野県上高地”で撮影したものです。特にこの 2 枚はお気に入りで、私たちにも焼き増ししてくれ額装もしていました。「いいわね〜」と褒めると嬉しそうにしていた顔が目に浮かびます。

院長も冒頭で申していましたが、一周忌を機に父の志と発展への努力を顧みて、厳しい病院経営を乗り切る糧にしたいと思っております。これからも秋本病院をどうぞよろしくお願い申しあげます。　（畑間　啓子）



秋本病院は
さらなる研鑽に努め、
みなさまとともに
歩む病院でありたいと
願っています。

秋本病院 ブリーフレター No.52　2012 年 12 月発行　発行者／秋本亮一　発行所／医療法人 AGIH 秋本病院　デザイン／有限会社 広告農場　編集／矢野 美恵子
Copyright　2009-2012　Akimoto Hospital All rights reserved.

医療法人 AGIH 秋本病院　福岡市中央区警固 1-8-3　TEL：092-771-6361　http://www.akimoto-hospital.jp/
◉診療科目：外科（消化器外科）・内科・胃腸科・肛門科・心臓血管外科・整形外科・脳神経外科・放射線科
◉外来診療受付：平日 8:30〜12:30/14:00〜17:00　土曜 8:30〜12:00　◉休診日：日・祝

日本医療機能評価機構

医療法人 AGIH 秋本病院 ［救急告示病院］［日本医療機能評価機構認定病院］
消化器内視鏡センター／健診センター／緩和ケアセンター

ごあいさつ



理事長・院長　秋本　亮一



昭和21年に創立された秋本病院は、今年で満66歳です。11月3日が創立記念日です。昨年11月26日に創立者の秋本徹が亡くなり1年が経ちます。一周忌を迎えるにあたり、前理事長　秋本徹(父)の創立時の志と発展への努力を顧みることにより、今後のこの病院の方向性を確かめるべくこの特集を企画しました。

終戦後、復員してきた父は昭和21年に今の博多区千代で外科医院を開業しました。祖父は外地(現韓国)で医院を開業していたのですが、引揚船が機雷に触れ沈没するという事故で亡くなったため、文字通り裸一貫からの開業でした。昭和28年に現在の中央区大名に移転、その後は日本の高度成長に伴う労災事故の増加やモータリゼーションによる交通事故の増加に伴い、外科医の父は当然のように外傷外科・救急医療の方向に突き進んで行きました。そしてその間、多くの方々にたくさんのご支援をいただき、病院はだんだん大きくなりました。

父は決して器用な世渡りができる人間ではなく、真っ正直で思い込んだらとことんやっていく人間だったような気がします。仕事をしながら、福岡市救急病院協会を立ち上げ、スポーツに関わり、天神西通りの発展に努力しました。

親子継承が必ずしも上手くいかないことが多い中で、平成8年に、築き上げた病院の院長を私に譲り、その後は静かに見守ってくれました。

特集では父を支えていただいた方々に原稿をお願いしました。子供のころから見続けてきた後ろ姿を思い出しながら、父の歩みと病院の歩みとを振り返り、今後の糧にしたいと思います。

故 秋本徹　年譜

大正９年３月13日	医師秋本忠平･琴の三男として福岡県飯塚市八木山で生まれる
昭和13年	旧制福岡中学校卒業
昭和18年	青島医科大学卒業
昭和19年	東京大学医学部大槻外科(研修)
	医師免許取得
４月	陸軍入隊
昭和20年８月	陸軍軍医として宮崎で終戦を迎える
９月	九州大学医学部友田外科(研修)
10月	引き揚げ船が沈没し、父　忠平没
昭和21年11月	福岡市博多区で秋本外科医院開業
昭和23年	高津幸子と結婚
昭和24年	長女啓子誕生
昭和27年	長男亮一誕生
昭和28年	中央区大名１丁目(天神西通り)に移転
昭和30年	九州大学医学部薬理学教室専修生
	次女典子誕生
昭和32年	大相撲指定医となる
昭和33年	鉄筋３階建新築　19床
	九州大学にて学位(医学博士)取得
昭和39年	救急告示病院
昭和45年	病院７階建てに増改築し、秋本外科病院となる
昭和51年	母　琴没
平成８年	医療法人AGIH秋本病院となり、 秋本徹が理事長、秋本亮一が院長に就任
平成９年	中国･青島大学医学部名誉教授
平成17年	中央区警固１丁目の現在地に新築移転　50床
平成21年	長男　秋本亮一が理事長･院長に就任し、名誉理事長となる
平成23年11月26日	自宅にて永眠(92歳)


医学生の時

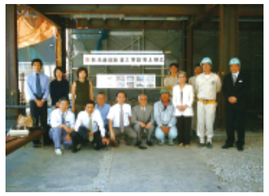
幼少時


昭和19年


昭和30年頃


昭和28年


昭和50年頃


平成16年新病院上棟式

資格･認定	医学博士 日本医師会認定産業医 日本相撲協会指定医	役職	福岡救急病院協会理事(昭和40年～昭和49年) 福岡市医師会代議員(昭和48年～昭和50年) 福岡救急病院協会副会長(昭和48年～昭和53年) 福岡医師協同組合監事(昭和51年～昭和55年)	表彰･その他	●表彰状 福岡市医師会長　永年会員(昭和43年) 福岡市医師協同組合　永年役員(昭和50年) 福岡市長　永年救急医療(昭和55年、60年) 福岡県知事　永年救急医療(平成２年、４年) 福岡市医師会長　永年救急医療(平成５年)
所属学会	日本臨床外科学会 日本救急学会 日本脳神経外科学会 日本麻酔学会	表彰･その他	●感謝状 救急医療　運輸大臣(平成８年) 福岡県知事(昭和44年、昭和49年) 福岡市医師会長(昭和43年) 福岡県県警本部長(昭和39年) 学　会　日本脳神経外科学会(平成８年) 太平洋小児外科学会(昭和58年) ●特別功労賞 救急医療　福岡県知事(昭和60年) ●栄誉証書 中国･青島大学医学部付属病院(平成６年)	社会活動	福岡市天神西通り発展会会長(昭和61年～平成15年) 福岡市あかるい街づくり協議会　理事 福岡市中央区地域振興委員 福岡市コンベンションビューロー委員 福岡ﾃﾆｽ倶楽部理事 福岡ふようライオンズクラブ会長(昭和50年～昭和51年)
				スポーツ･その他	スカッシュラケット全日本シニア選手権優勝(昭和47年) 講道館柔道三段(平成２年) 九州テニス協会功労賞(平成８年)

秋本徹先生の思い出

福岡和白病院　院長　伊藤　翼



わたしは昭和43年（1968年）九大医学部卒業ですが、われわれの学年は医師国家試験をボイコットし、インターン制度が廃止された年でもある。同級の外科希望者10余名は非入局路線と称し、外科系各科と麻酔科の2年間のローテーションを大学に認めさせた。秋本徹先生に初めてお会いしたのは麻酔科ローテーション中で、その後、ICU勤務中も秋本外科病院に週1回の当直でアメリカ臨床留学（5年間）直前まで約2年間お世話になりました。

先生は温和で優しく、患者さんはもちろん、職員を叱るのを見たことがありません。またスポーツ医学では全国的に有名で大相撲をはじめ、プロ野球選手、プロレスラーがよく来院していました。プロレスのリングサイド・ドクターとして観戦させてもらったこともあったし、アントニオ猪木が入院中に血圧測定すると、上腕がわたしの太腿よりも大きかったことをよく憶えています。

秋本外科病院は当時から救急告示病院で、当番日には多発外傷など救急車のサイレンの音と救急医療に慣れたことは、アメリカで最も忙しく危険なハーレム・ホスピタルで41年前に外科インターンを始めた時に大いに役立った。当時、息子さんの亮一君は高校生でしたが、現在、福岡市救急病院協会長として活躍しておられるのでまさに隔世の感がします。

最後に、わたしは大学時代、本学医学部と野球一筋でテニスと全く縁がなかったが、先生はテニスの名選手でオパール会のメンバーとして活躍されていました。その先生にテニスの手ほどきを何度かしていただいたことが、後のわたしの人生に大きく影響しました。アメリカから筑波大学に帰国しましたが、大学病院開院直前で、筑波には飲み屋もない頃、テニスコートだけは沢山あって、テニスクラブに入り熱中しました。当時筑波大学では福井選手が活躍していました。5年後の1982年佐賀医科大学の創設期に佐賀に移り、早速芝コートで有名なウインブルドン九州に入会しました。その10数年後、戦後のテニスの神様といわれた隈丸次郎さんがウインブルドン九州でプレー中に急性心筋梗塞で倒れ大学に運ばれ、わたしが緊急冠動脈バイパス術をさせていただきました。その数年後回復された隈丸さんとペアを組んで、ある大会で準優勝したことが懐かしく想いだされます。

秋本徹先生、救急医療とテニスのご指導ありがとうございました。



昭和45年頃　秋本徹が撮影した、伊藤翼先生

秋本徹先生を偲ぶ







友田病院　理事長　友田　秀教

今年も大相撲が博多の街にやってきました。

秋本病院、そして秋本徹先生と云えば大相撲を思い出す程秋本病院と大相撲との関わりは有名です。

秋本病院は昭和三十九年福岡市救急病院協会発足当初から救急告示医療機関として現在に至っていますが、徹先生も発足当時から協会の理事として約十年間、副会長として約五年間を協会の運営発展のために尽くして来られました。

先生は、温厚篤実、決して自己顕示欲のない方で、もの静かで落ち着いた理事報告や、すらりとした長身でスマートな物腰の上に柔和な温顔が忘れられません。

理事会の帰り道に、たまたま先生とご一緒したとき、「これからの救急医療は救急出動件数の増加や、公立病院の救急医療への参入等で民間病院の救急対応はますます厳しくなるよ」とおっしゃった言葉や、現在の秋本病院の新築披露の会場でお目にかかり御挨拶申し上げた時、杖をついておられましたが、「年を取ると足が弱っていかんなあ」と苦笑しておられた先生のお顔が思い出されます。

今後の福岡市に於ける救急医療も先生の御意志を受けつがれた秋本亮一会長率いる福岡市救急病院協会が行政や市民と互いに連携し信頼関係を保持しながら地道に活動を行って行く事が肝要であります。

秋本徹先生、本当に長い間お疲れ様でした。

心からご冥福をお祈りいたします。

平成二十四年十一月五日

秋本徹先生の思い出

博多消防署（救急救命士１期生）　鳥居　馨

昭和53年10月下旬ごろ、救急車で旧秋本病院（中央区大名1丁目）に、患者さんを搬送したときに、なんともいえないいい匂い、びんつけ油（つばき油）の香りがしてきた。怪我をされたお相撲さんが座っており、あまりのおおきさにびっくりした思い出があります。

今のソラリアプラザの場所に、以前は福岡スポーツセンター（S30～S48）がありました。冬はスケート場、毎年11月は大相撲九州場所も催されていました。故名誉理事長は、場所中の診療をお手伝いしたのが縁で日本相撲協会指定医となり新弟子検査も、病院でなさっていました。その仕事は現在も理事長・院長　秋本　亮一先生が受け継いでおられます。

交通事故による傷病者の医療を確保しようと、昭和39年に救急告示制度（24時間診療）が発足して、福岡市救急病院協会は、S40年3月に設立されました。当初は私立病医院だけの23施設で、救急隊との緊密な連携のもと、救急患者の医療の確保、医療技術の向上を図り地域医療に寄与することを目的として発足しました。設立当初から、故秋本徹名誉理事長は、協会の理事そして副会長（S50年4月～S56年4月）としても活躍されました。協会の主な事業は、消防局指令課と協会病院の一方通行着信電話の設置・S50年の救急病院休日当番制発足・看護師研究会・集団事故の救急体制・海外視察研修・防災総合訓練・消防学校での訓練・救急ヘリコプター「赤とんぼ」の体験同乗などで、営々と維持発展に貢献してこられました。現在も事業は、少し変化しましたが現会長　秋本亮一先生にしっかり受け継がれています。

協会の設立と同時に、S41年に財団法人福岡救急医療センター（H15年発展的解消）が設立されました。旧福岡市消防局（住吉2丁目）の倉庫に医療器具を管理して、救急病院からの要請に応じ直ちに器具を搬送し、傷病者に対し迅速・適切な処置をおこなうのが目的でした。当時、協会は、事務局を消防局救急救助課（現救急課）においていました。S63年12月頃、男性が、ふぐの肝を食べて40分後口や指先のしびれがあり、救急車で秋本病院に搬送。すぐ胃を洗浄し、ブドウ糖液の静脈注射1時間後に呼吸停止。病院からバードマーク7（人口呼吸器）、酸素ボンベの緊急要請があり、搬送したことがあります。これらの処置のあと、男性は元気に退院されました。大先生いわく、「フグ中毒（テトロドトキシン）の死因は呼吸筋麻痺による呼吸停止。可逆性の毒なので、呼吸管理さえしておけば救命できる。」と力強くいわれたことを、いまでもはっきり思い出します。

大先生、長い間お疲れ様でした。天国でその笑顔で、福岡市救急病院協会・救急隊をずーっと見守ってください。

合掌



救急ヘリコプター「赤とんぼ」の前で。
左側から、秋本徹、佐田先生、南川先生、首藤先生（鳥居氏提供）

Photo Gallaey 1

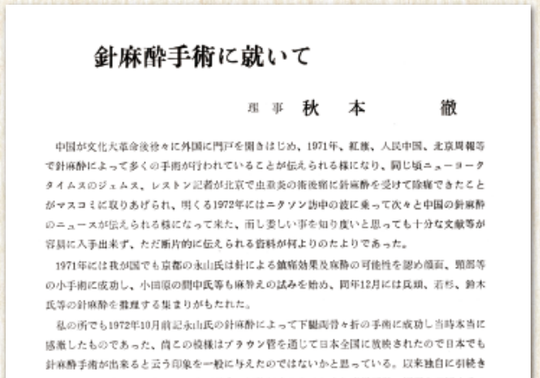








医学生時代





大名1丁目秋本外科手術室

針麻酔手術に就いて

理事　秋　本　　徹

中国が文化大革命後修々に外国に門戸を開きはじめ、1971年、紅旗、人民中国、北京周報等で針麻酔によって多くの手術が行われていることが伝えられる様になり、同じ頃ニューヨークタイムスのジェムヌ、レストン記者が北京で虫垂炎の術後癌に針麻酔を受けて除痛できたことがマスコミに取りあげられ、明くる1972年にはニクソン訪中の波に乗って次々と中国の針麻酔のニュースが伝えられる様になって来た、而し要しい事を知り度いと思っても十分な文献等が容易に入手出来ず、ただ断片的に伝えられる資料が何よりのたよりであった。

1971年には我が国でも京都の永山氏は針による鎮痛効果及麻酔の可能性を認め頭蓋、顎部等の小手術に成功し、小田原の岡中氏等も麻酔えの試みを始め、同年12月には良順、若杉、鈴木氏等の針麻酔を雑誌する集まりがもたれた。

私の所でも1972年10月前記永山氏の針麻酔によって下腿両骨々折の手術に成功し当時本当に感激したものであった、尚この模様はブラウン管を通じて日本全国に放映されたので日本でも針麻酔手術が出来ると云う印象を一般に与えたのではないかと思っている。以来独自に引続き追試を重ねて来たのであるが、先づ従来の経験研究からはじまり東洋医学の概要を理解するのに永い時間がかかり、針を用いて"ペイン"に対しては可成り早くから優れた成果を納める事が出来たのであるが、目指す針麻酔手術を軌道に乗せるにはもう一歩と云う所まで漕ぎつけ乍ら、術前の不安感や、皮切痛、牽引痛等に対する問題が最後まで残ったが、先日来、虫垂炎、下腿骨々折、鎖骨々折、膝関節鏡視下断裂、鎖骨々折等次々と成功例を重ね、漸く或程度の確信を得たので、之等に関しては症例を整理中である。その間2回に亘る医療訪中団の報告、特に飛松氏等の評価に亘る現地見聞記や御高見は非常に有難かった。最近では飛松氏等の豊島病院や、順河台日大病院、昭和大学、東京逓信病院、関東労災病院等と逐次成果が報告される様になった。

昨年（1973年）11月天津の呉成中氏を団長とする中国医師団が来日し、特に上海第一医学院脳外科の陳公目氏の18ミリを交えての針麻酔手術には非常に感銘をうけた、多くの症例が発表されたが、最近の中国では針麻酔は全手術の約15%（病院によって多少異る）で、硬膜外麻酔が約30%と可成り多い様である。

現在針麻酔を理解するのに最も適当な考え方は、"Get control theory"と云われているが、これを唱えたカナダのマックギル大学、Prof, Reonald Melzack は、針の麻酔効果は固定なく"痛みの閾門"は脊髄の膠様質の指令により又脳自体の指令によって開閉されており氏は又中国で弱い鎮痛剤を併用したり患者自身に針麻酔を信じさせている事をつけ加えている。この説の共同研究者ロンドンの Prof, Patrick D. Well 氏は、針の表示又は電気を用いることによるもので、中国では電気を用いて神経で最合する新ら

— 6 —

中国青島からの秋本徹先生への記念文

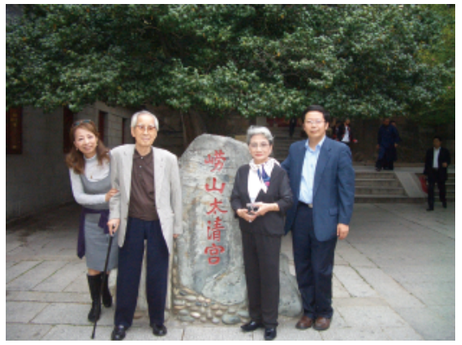
（原文のまま）

中国青島大学医学部附属病院 副院長、小児外科教授、
中国小児外科学会常務委員、
中国小児外科学会肝胆外科学組組長
董蒨（Dong Qian）M.D, PhD.

秋本徹先生のご逝去からまもなく一年が経とうとしています。この一年間、私の頭の中では秋本徹先生のことが時々ぐるぐると回っていました。秋本徹先生の訃報のお知らせを知ったシーンを今でもはっきり覚えています。昨年の11月26日に、わたしはちょうどコンピューターの前に座って、4年前に秋本徹先生と奥様が青島を訪問された時のデジタル写真を整理していた時に、メールボックスを検索して、亮一先生からの本当に自分の心を砕くような知らせのメールを見まして、大変なショックを受けました。本当に悲しくて、涙が止まりませんでした。

初めて秋本徹先生と奥様に出会ってから、18年間過ぎました。この18年の間に、中国青島あるいは福岡で何度も先生に会いました。妻とわたしが徳島大学病院に留学した時、秋本徹先生と奥様が本当に自分の両親のように世話していただきました。秋本徹先生を通して、先生のご一家および秋本病院とも親交を深めました。秋本徹先生と奥様は何度も中国青島大学病院を訪問して、病院にいろんな援助をしていただきました。また、青島大学元医学部長の郭先生、前医学部長兼病院長の苗先生、医学部長兼病院書記の姜先生、前副院長の胡先生など数多くの中国の先生達は秋本先生の病院とお宅に行って、見学、訪問いたしました。いつも先生と奥様の手厚いおもてなしをいただいて、ほんとうに感謝の言葉もございません。妻は福岡子ども病院で研修した時、娘は福岡に行った時にたいへんお世話になりました。本当にいろいろ親切な秋本徹先生の音容笑貌が今も目の前に浮かんで、妻も、娘も一生忘れられません。秋本先生は青島大学病院に対する深い感情、正直で、親切な好尚な人品と徳性がわれわれにすごく深い印象を与えていただきました。

秋本徹先生はわたしおよびわたしの家族にとても重要な影響を与えてくれる日本の敬慕する先輩だと思っております。


山東省　勞山で 薫蒨氏（右端）と


青島大学医学部長　苗志敏氏（中央）と〈創立110周年記念式典にて〉

今年9月末に、中国・山東省青島で起きた反日デモで、スーパーマーケットのジャスコ黄島店は、過激したデモ隊によって建物や店内が破壊された事件が起こりました。先生の奥様が電話してくれた時、私の頭に秋本徹先生の像が浮かびました。天国にいらっしゃる秋本徹先生はきっとギクシャクしている中国と日本との関係と中国青島の大学に留学している日本人の学生さんを心配していると思いました。青島大学に留学している日本人の学生たちがこのジャスコ黄島店で発生した事件を知って、きっととても心配していると思いました。当時、ちょうど中国の中秋節前で、妻と相談した結果、わたしはジャスコ青島店で多くの月餅を買って、青島大学での27名の日本人留学生全部に一人ずつ1ケースの月餅を送りました。当時の厳しい時期に青島大学での全部の日本人留学生に普通の中国人先生の暖かい気持ちを感じてくれたら、みんなきっと安心すると思いました。ジャスコ青島店の日本人の社長さんもこのことを知って、とても喜んでくれました。彼はジャスコ黄島店の当時の状況を教えてくれて、これからも続けて頑張ると言ってくれました。青島大学の日本人の学生たちも喜んで、〝董先生、われわれはみんな安全で、安心に勉強しています、ご安心ください〟と言ってくれました。青島大学の担当の先生方とトップの担当の方も温かく日本人の学生たちを見守っています。いま、いろいろ状況が全部回復してきました。秋本徹先生もきっと安心なさると思います。

これから秋本徹先生のご恩情とご指導を一生忘れずに、日中両国人民の世世代代の友好のことをしていくと決心します。天国にいらっしゃる秋本徹先生はご安心くださいますようお願い申し上げます。また、秋本徹先生が創業した秋本病院のますますのご発展を心からお祈り申し上げます。


思い出の中国・青島の街並み


青島大学医学部で記念植樹

先生と楽しい日々を

元朝日新聞運動部部長　東京相撲記者クラブ会友
波多野　亮



昭和60年　新国技館落成記念祝賀会にて　左から進藤一馬福岡市長（当時）、入江相政侍従長（当時）と一緒に

秋本徹先生にはじめてお会いしたのは大相撲九州場所の開設時。だから六十年近くになるが少しも長かったと思わないのは、なぜだろう。先生と楽しくやってきたからだろうか。

先生の一周忌に思い出したことなど書いてみる。やはり書き出しは相撲からか。国技館の完成祝いなど相撲協会の行事をはじめ親しい力士の祝いごと、引退、断髪式などにも揃って足を運んだ。先生は記者連中とも仲が良く記者クラブの熱海一泊総会にも喜々として二度参加された。ともかくよくご一緒した。先生は常に気配りをされたが医療の場だけでなく大雑把な相撲社会でもそれを見た。場所の準備をする先発組は大変だろうと先生個人で先発事務所全員を招き慰労会を開いておられた。もちろんみんな大喜び。また春日野さん（元栃錦）が理事長故に夜の外出を自粛していると聞くと料亭に誘われた。私もお相伴にあずかったが、やがて春日野さんが「昔チャンコ番をやっていたんだ」とねじり鉢巻きで鍋奉行をかって出て大張り切りといった具合。ドイツ文学者で横綱審議委員長もやった高橋義孝先生が責任者となり「相撲歳時記」が発行された時、先生は「力士とケガ」を執筆されて赤坂プリンスホテルでの出版記念会に奥様同伴で出席された。会は大変盛り上がり先生は「陛下と相撲」を描かれた入江相政侍従と話がはずんでいたが、その時の先生の輝いていた顔は忘れられない。この文を書くので私はその歳時記をひっぱり出して読んだがいかにも外科医の権威らしい先生の文章、相撲好きの昭和天皇をうまく書いた入江さん。往時を懐かしく思い出しそのまま夜明けまでかけて読み上げたものだ。あまり知られていないが先生はそれまで身長、体重しか測っていなかった新弟子検査に血液検査、心電図、胸のレントゲン撮影などを加え健康記録を保管して、問題児は追跡調査をするぐらいやるべきだと協会へ進言、今日に至っている。先生の立派な足跡である。

先生が最も楽しみにしておられたのはホットマン会。メンバーのイニシャルが会名だが先生の目に適ったいろいろな職歴の人々がそれぞれの学識、経験を語り合う。まさに談論風発。歩いた道が違うだけに話はおもしろく大変勉強にもなりいつも次回を楽しみにしていたが、寄る年波に一人二人と消えて寂しくなったところにお頭の先生が亡くなられ、これからどうするか残っている者は頭を痛めている。先生と私は福岡スポーツマンクラブの会員で会合にはいつも誘い合って二人で出席していた。いつも二人にみんなが気付き〝二人組〟と呼ばれたこともあった。この二人組、中牟田喜一郎さんが主宰されていたオパールテニスに、もうプレーが出来なくなっても、会場が岩田屋コートから佐賀市のグラスコートに移っても毎年、旧友との再会を楽しみに通ったものだ。五月の日本海海戦記念日には揃って筥崎宮へお参りして自衛艦に乗り博多湾周航をもコースにしていたのだが……。また私が関係していた福岡国際マラソンには毎年平和台のスタートから夕方の表彰式、レセプションまでお付き合いいただいた。

本当に寂しくなった。



親交の深かった 故春日野理事長（元横綱　栃錦）



大鵬親方と

テニスの仲間と





波多野氏（左）、九重親方（中央）

ドクター はっけよい！

九州場所、ケガした力士診療〝陰の殊勲賞〟

（日本経済新聞朝刊文化面　昭和63年12月8日掲載）　秋本　徹

入院させリハビリまで…

大相撲九州場所、福岡マラソン、そして女子柔道…。晩秋から年の瀬にかけて、福岡の歳時記にはスポーツが並ぶ。お相撲さんやマラソン選手が、寒さとあわただしさを街に運んでくる。そして私の病院も忙しい季節を迎える。

大相撲九州場所が準場所として始まった昭和32年以来30年余り、私は外科医として力士を診察してきた。新弟子検査から、医務室への派遣、外傷の治療、入院、リハビリまで、ずっと受け持っている。

東京、大阪、名古屋のような大都市は、大きな病院で新弟子検査をやり、あとはそれぞれの相撲部屋かかりつけの医師が診るようになっている。福岡の場合、部屋の宿舎が他の都市程散らばっていないこともあって、おのずと私のところで診ることが多くなる。そういうわけだから、大勢の力士の外傷に関するカルテが、駆け出しのころからそろっている。番付を見渡してみても、既往症がない人は三分の一にも満たない。

ケガがないのは強い力士の証明だ。連勝は五十三でストップしたが、九州場所八連覇を達成した千代の富士の場合、ここ数年、私が診る機会はほとんどなかった。しかし、ファンならご存じの通り、若いころの彼は一度脱臼した右肩関節の具合を常に気にしていた。

そのうえ昭和五十年十一月、当時十両の千代の富士は、右の上腕二頭筋（腕の力こぶ）の腱を切ってしまった。肩関節の脱臼に加えて、このケガである。並みの力士なら弱気になるところであろう。だが、病院にきた千代の富士はこう私に質問した。「どうしたら、取れるようになりますか。」

このケガは、一般の人であれば手術するのが普通だが、術後の安静期間やリハビリ期間が長期にわたる。力士の場合は、二、三場所休むことになり、力士生命にかかわってくる。

手術するかしないかは、個々のケースで慎重に判断しなくてはならないが、千代の富士の場合、手術しないで治す方を選んだ。私は「一場所、二場所は番付のことは考えないで、再起を期すことです」と助言した。

症状としては、上腕二頭筋よりも肩関節の方が深刻だった。力士を続けようと思ったら、手術をしないで治さなければならない。その為には、筋力をつけることと、肩がはずれるような恰好をしないことだ。私はそう千代の富士に説いた。「肩を上げてはいけない」と。

千代の富士はこの助言を守ってくれた。以後の活躍は記すまでもない。強引な投げにこだわらず、ぐっと下から攻め上げる相撲になった。肩を上げると、大きな相手にいっぺんにもっていかれることを、ケガを通して身体で覚えたのだろう。

どのスポーツにも言えることだが、自分の体にあった技を覚えると、選手は急速に伸びる。野球の投手のフォームでも、後になって、無理に矯正するのはよくないと思う。

自分の体を知るということは、自分の弱いところを知ることでもあるのだ。一流選手と言われる人は概してケガが少ないが、ケガを克服する力においても一流である。その力をつけるのは日頃のケイコであり練習だ。短期間で筋肉をつける訓練には問題も多い。短距離走などには効果があるが、十五日間、年六回の大相撲はマラソンと同じなのだ。

千代の富士をはじめ、強くなった力士に共通しているのは、休むことより取ることを考える積極性だ。そして若い伸び盛りの力士の場合、常識では考えられないぐらいよく治ることが多い。

昭和四十年、東関脇だった北の富士は、左足をねんざして来院、一言「明日とれるようにして下さい。」昭和四十八年は貴ノ花戦で輪島が右手の指の間を裂いた場所だが、同じ日、足の指をねんざして来院東関脇の北の湖は、「自分はやるから簡単でいい」という。見ると患部がひどくはれていた。ところが、二人とも休場をせず、しかもゆうゆうと勝ち越してしまった。

三十二年、大関を目前にした琴ヶ浜が鎖骨の外側を脱臼した。「どうしても十番勝ちたい」という。私は毎日ばんそうこうを何枚も重ねて患部を固めた。今でいうテーピングである。

しかしもちろん、気力だけで相撲を取れるわけではない。肝心な時は医者がストップをかけなければならない。そして、この病院で言われたら絶対だ、と思われるようになって初めて、医者は信頼を得たことになる。

スポーツドクターとしての私の病院も一朝にしてできたものではない。九州場所が始まったころは、ケガをすると力士はすぐ福岡を離れて行ったものだ。私がレントゲン写真を発表すると、すぐに東京あたりの専門医のコメントが、反響として返ってきたりした。そうやって鍛えられたわけだ。今日、一応信頼を得ているのは長い間、大勢のスポーツ選手の治療を手掛けてきた積み重ねの結果である。

回復の裏に努力あり

柔道の山下泰裕選手が、モスクワ五輪の年に下腿骨を骨折したのも福岡だった。一か月の入院生活。山下選手は素直で真剣だった。回復期には早朝や日曜日、人影の少なかったころをみはからって大部屋でリハビリに集中した。研究熱心な人で、ギブスをつけたまま、よく柔道の試合を見に行っていた。

忘れられないのは大鵬関だ。昭和四十二年、清国戦で左ひじを骨折し、連続優勝を目前にして休場、入院した。千秋楽の日、各部屋が一年の納めの場所の打ち上げの最中のことだ。横綱は左ひじを抱えて七階建ての病

マラソンのデンシモも

この四日の福岡国際マラソンに出場したデンシモは、靴擦れが化膿して当初出場できるかどうか心配な状態だった。十一月三十日に切開してウミを出した。驚いたのは、その回復の早さだ。翌日診た時には、幹部がすっかり乾いていた。大会前、彼は毎日キチンと通院してきた。何とか出場のめどがついた時にはホッとした。彼もまた、朝病院に来る前、暗いうちに公園を走っていた。

三十数年、様々な分野の、様々な国の選手が病院にやって来た。福岡国際マラソンで四連覇したショーターは「ホテル（西鉄グランドホテル）のそばにドクターがいるよ」と来日する選手にアドバイスしてくれているという。スポーツマンたちに、福岡のよい思い出を持って帰ってもらおう―そう思っている。

Photo Gallaey 2



両国国技館にて



横綱大鵬断髪式にて



柔道の山下泰裕氏と



横綱千代の富士（当時）と

名誉理事長の思い出

秋本病院　元総務部長
山本　道男

理事長が逝去されてはや一周忌とのこと、月日の経つ早さを改めて感じる今日この頃です。先日ご子息である亮一先生よりなにか思い出を書いてくれという手紙をいただきましたのでペンをとりました。

考えてみますと、私ほど理事長にお世話になり、貴重な経験をさせて頂いた者はいないのじゃないかと思うほど、生前にとても親切にしていただきましたことは忘れられません。

私が理事長と初めてお会いしたのは、平成15年3月銀行より出向して挨拶のためご自宅に伺ったときでした。温厚で優しそうで、「本当に外科手術をされるのか?」という強い印象をうけたことをおぼえております。

一番の思い出は、大相撲九州場所でのはじめての力士との出会いです。本場所は11月中旬より開催されますが、本場所の一ヵ月前の西の日か午の日に開かれる「御免祝い」という催しがおこなわれます。その会場にお供したとき（毎年お供しました）大勢の力士が参集し、大勢の後援会関係者、報道関係者が参加して「本場所の興業開催が認められたことをお披露目する集会」だそうです。（のちに理事長より聞きました）

つぎが、病院の横に植えられている一本の「マロニエの木」です。そもそも外国旅行をされたとき、どこかの国でみられて気に入られ、帰国後さっそくマロニエの木を探されたそうです。

そして、当時天神西通り発展会の会長であったため、何とか天神西通りの街路樹をマロニエにしようと、中央区の区長さんに頼み込んで植えられたそうです。初夏に紅色の花びらをつけきれいに咲きます。毎年花が咲くころを楽しみにしておられ、咲き始めるとカメラを手にシャッターを切ってよろこんでおられました。今もその姿が鮮明に思い出されます。

健診企業の産業医訪問にも思い出があります。毎月2社の定例訪問で、1社は世界で有名な企業のEV会社福岡支店です。担当者から社員の問題点等の問い合わせに的確なアドバイス、指導をされ次回には状況のフォローまでされ、担当者も喜んでおられました。もう1社は地元金融機関です。常務、人事課長ほか関係の担当者が参加し、職員のみなさんの健康状態、問題点等金融機関が抱える職員に対する疑問、質問に対しても同様に指導、フォローされておりました。まだいろいろ思い出はたくさんありますが、ここでペンを閉じさせていただきます。

最後に名誉理事長の一生は最高の生涯であったとおもいます。最高の伴侶である幸子夫人と出会われたことです。日頃のご夫婦の行動をみて強く感じておりました。

在りし日の先生の面影をしのび、思い出をのべて、ご冥福をお祈り申し上げます。


職員の歓送迎会（山本氏は前列左から2人目）



マロニエの木


岡山旅行の新幹線車内にて

先生。どうか心安らかにおやすみください

長崎県壱岐市郷ノ浦町　医療法人（社団）協生会　品川病院
田中　修
（秋本病院　元放射線課　課長）

本当に月日の経つのは早いものです。先生とお別れしたのが、つい最近のような気がいたします。

亮一先生には失礼かと思いますが徹先生を父親のように感じていました。

院内旅行の楽しい思い出です。私の第二の故郷の岡山に院内旅行に行った時も個人的に利用したことがある「割烹さかぐち」で地方名ベラタという穴子の稚魚を料理長に無理矢理頼んで料理に出してもらいました。先生は大変気に入られたみたいでベラタが他店で出されるといつも笑顔で「田中君、ベラタだよな。これ、美味しいんだよな」と、よく言われていました。倉敷での昼食では、メニューにない岡山名物の穴子丼を注文しました。「う〜ん。これも美味しい」と奥様に笑顔で話されていました。本当に懐かしいです。あの時に戻れるのでしたら、今度は私の知人の備前焼の窯元に案内させてください。

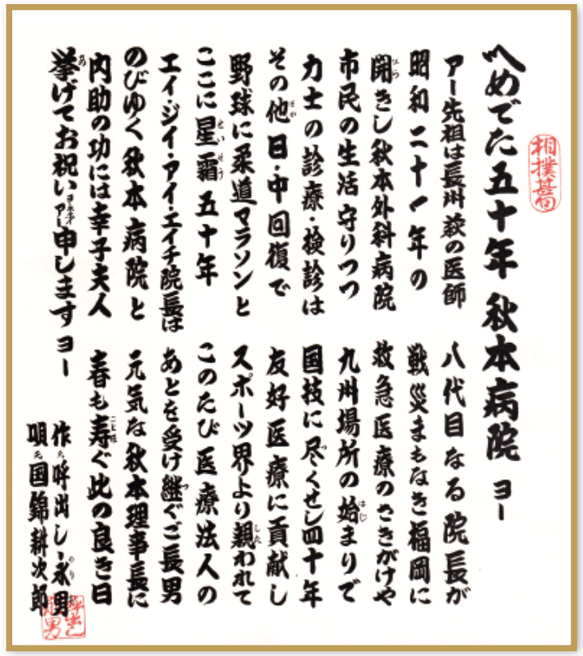
私と二人で行ったドームでの野球観戦も楽しい思い出です。奥様から「理事長は、すぐビールを飲みたがりますから必ずご飯を食べさせて」と頼まれていました。やはり球場に着くなり先生は、「ビール飲もうか」でした。奥様からの言葉を思い出し「弁当を買って来るから弁当を残らず食べたらビール」と言うと先生は、弁当をバタバタと流し込み「食べたからビール」でした。父親と野球観戦に来ていると錯覚するほどでした。文章を書きながら当時のことを思い出し先生の笑顔や話し方を懐かしく思います。あのころに戻りたいです。

釣りの話も楽しい思い出です。先生は、私の休み明けには必ず「釣れたかな」とよく声をかけてくれました。相島に一緒に釣りに行こうとよく言われていましたが、一度も釣りに行けなかったことが本当に残念です。

秋本病院に二十年勤めさせていただき楽しい思い出をありがとうございました。

職員から

病院との軌跡


相撲番附

へめでた五十年 秋本病院 ヨー

アー先祖は長州萩の医師　八代目なる院長が
昭和二十一年の　戦災まもなき福岡に
開きし秋本外科病院　救急医療のさきがけや
市民の生活守りつつ　九州場所の始まりで
力士の診療・検診は　国技に尽くせし四十年
その他日・中回復で　友好医療に貢献し
野球に柔道マラソンと　スポーツ界より親われて
ここに星霜五十年　このたび医療法人の
エイ・ジイ・アイ・エイチ院長ほ　あとを受け継ぐご長男
のびゆく秋本病院と　元気な秋本理事長に
内助の功には幸子夫人　春も寿ぐ此の良き日
挙げてお祝い申しますヨー　作・呼出し・木男
頃・国錦耕次郎



看護部・医療情報部　部長
野村　春美



秋本病院への入職を振り返ると当時はまだ秋本外科病院でした。入職した年の八月にCTを導入、院内の改装を終えて検査可能になると頭部外傷、脳血管疾患での救急車搬送が急増し夜間緊急手術を行うこともありました。

平成八年には医療法人AGIH秋本病院となりました。

また創立五十周年を名誉理事長と共に相撲甚句で迎えたことや毎年の大相撲九州場所での新弟子検査、医務室看護師派遣など長きに渡りお相撲に係ってきました。以前は福岡国際女子柔道の派遣もありました。スポーツに携わりながら針治療も行っていました。やはり天神西通りから警固への新築移転は生涯一大イベントでした。その中でチーム力、思いやりを再発見することが出来、連携しながら無事に患者様の移動も終えることが出来ました。

いつもスタッフへ声を掛けてくださり、よく特徴を覚えておられました。今でも『野村君』と呼ばれて『はい』と返事しながら振り返りそうです。

名誉理事長が亡くなられて一年になろうとしています。毎年お相撲の頃になると名誉理事長を思い出しながら何をしているでしょうか？

秋本名誉理事長を偲んで

理学療法課　課長
桜井　善夫



故秋本名誉理事長の追悼特集号発行にあたり、秋本病院永年勤続のひとりとして、長年のご厚情に深い感謝の思いでいっぱいです。

振り返れば25年前初めて受けた就職面接が秋本病院でした。数日後に、採用通知あり。その理由は成績でも賞罰でもなく笑顔。

その時は意味が解らずポカ～ンとした気持ちでした。そして就職後、大先生にいつも言われたことが「君の仕事で一番大切な事は、先ず信頼を得る事。君の〝つくらない笑顔〟は、ホッとするし、安心感を持ってもらえる。それを忘れなさんなよ」でした。

あれから25年、大先生の言葉をいつも心掛け、患者さまに笑顔で接し、信頼を得て、施術をするからこそ、多少辛いリハビリでも嫌われることなく施術できているのだと思います。

これからも医療従者として、技術の研鑽だけでなく、名誉理事長の言葉をいつも心掛け邁進して行く事をお誓いし、ご冥福をこころからお祈り申し上げます。



岡山旅行にて

名誉理事長先生を偲んで

健診・内視鏡センター　師長
西岡　景子



私は昭和62年に看護学生として当時秋本外科病院であった当院に就職しました。以来25年余りお世話になっております。先生は「いつ休んでおられるのか？」と常々思っておりました。入院・外来・手術・救急診療をこなし、その他大相撲や柔道、マラソンといった国内外のスポーツのバックアップ、果ては天神西通り発展会会長等々、枚挙に遑がありません。先生に診て頂きたいと遠方よりお越しの患者様が多数でしたし、私の亡き父も2時間半かけて通っておりました。先生は理事長夫人と共にいつも私達職員にお心遣い下さいました。春の歓送迎会、夏の海水浴、秋の院内旅行、クリスマスリース作り、冬の忘年会等々。四季折々の記念にとよくカメラを持参し、私たちの笑顔を記念に残してくださいました。厳しさの中にも優しさやユーモアにあふれた私達の愛すべき理事長先生でした。本当にありがとうございました。

Photo Gallaey 3



琴欧洲関と



アントニオ猪木氏と



大鵬親方と



マロニエの木の下で



天神西通り発展会の皆様と



米寿の祝い



金婚式記念



王貞治氏と



どんたくパレード（前列右端が秋本徹）



息子･婿･孫と